

滋賀県高島郡高島町拝戸古墳群第3支群第10号墳現状実測調査報告

関西学院大学考古学研究会

1. はじめに

拝戸古墳群は滋賀県高島郡高島町下拝戸に所在する。琵琶湖西岸における唯一の沖積平野である高島平野の南部に広がる山麓の緩斜面に3支群が分布している。国鉄湖西線関係の分布調査の時点では計21基が確認され、第1支群は円墳3基から成り内部主体として木棺直葬1基、横穴式石室2基、第2支群は全て横穴式石室を内部主体とし前方後円墳、方墳各1基、円墳6基の計8基、そして第3支群は第2支群と同様全て横穴式石室を内部主体とし、前方後円墳1基、円墳9基の計10基から構成されると報告されている^①。

その後の調査により第2支群で4基、第3支群で1基がそれぞれ新たに確認され計26基となった。また、円墳と思われていた第3支群第10号墳が帆立貝式の墳丘を有し、築造時期も他の古墳よりも遡る可能性が指摘された^②。

今回、関西学院大学考古学研究会は帆立貝式前方後円墳と推定される古墳について、墳形の確定を図り今後の研究と保存の為の資料を作成するべく、昭和57年10月と11月の2度にかけて現状実測調査を実施した。

なお調査にあたり、地元の高島町教育委員会技師の白井忠雄氏、同調査員の谷本博氏を初め、滋賀県教育委員会文化財保護課技師の兼康保明氏、滋賀県埋蔵文化財センター嘱託の山口順子氏から御指導、御協力をいただいた。ここに記して厚くお礼申し上げます。

2. 歴史的環境

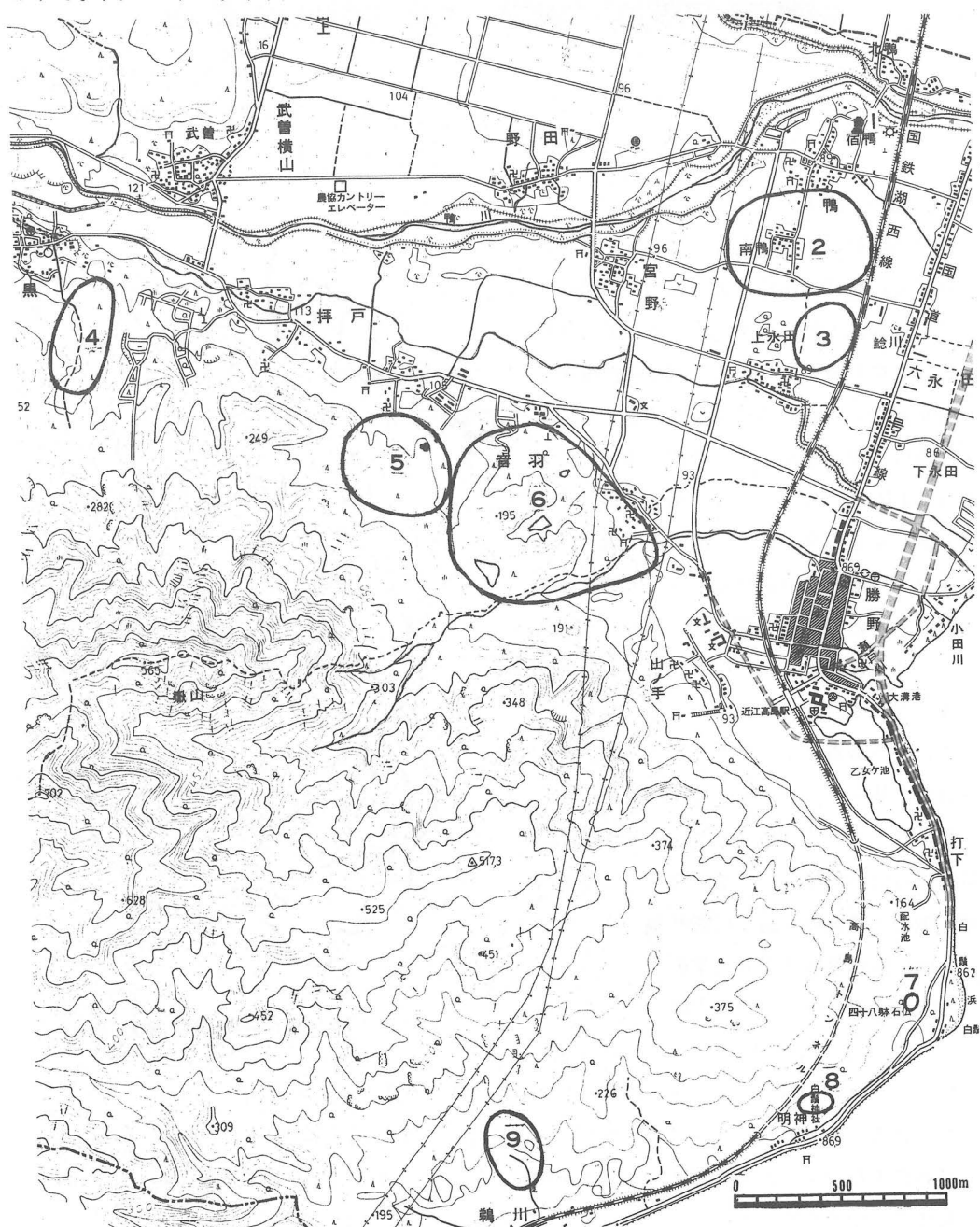
高島町は安曇川と鴨川による堆積作用によって形成された平野部の南端を占める。当地方の縄文・弥生時代の実態についてはほとんど知られておらず、縄文時代早・晩期の土器片が、また弥



第1図 拝戸古墳群位置図

生時代前・中期の土器片がそれぞれ少量ずつ鴨遺跡から出土しているにすぎない。^③

古墳時代になると、鴨川南岸約100mの地点に全長約45mの前方後円墳である鴨稻荷山古墳が築かれる。大正12年に京都帝国大学文学部考古学研究室により発掘調査が実施され、二上山の白



- | | | |
|-----------|-----------|---------|
| 1 鴨稻荷山古墳 | 2 鴨遺跡 | 3 永田遺跡 |
| 4 東山古墳群 | 5 拝戸古墳群 | 6 音羽古墳群 |
| 7 四十八駄古墳群 | 8 白鬚神社古墳群 | 9 阪畑古墳群 |

第2図 周辺の遺跡分布図

色系凝灰岩製の家形石棺内からは金銅製の冠・沓・魚佩や金製の耳輪・垂下飾などが、棺外からは馬具・須恵器が検出された。特に棺内に納められた金銅製、金製の副葬品は新羅慶州の王陵級の古墳から出土する副葬品との類似性が指摘されており、被葬者が朝鮮半島との深いつながりを有していたことが窺える^④。被葬者については当初、継体天皇の父である彦主人王ではないかと推定されていたが、副葬品の年代が6世紀前半と考えられ年代が一致しない為に、現在では継体天皇擁立に関係した当地方の有力豪族が考えられている^⑤。

その後、鴨稻荷山古墳に関しては当研究会が現状実測調査を昭和53年に実施している^⑥。また昭和56年に県道拡幅工事に先立つ周濠確認調査が実施され、周濠の有無については確認できなかったものの古墳の南方に方形墳が埋没していることが判明した^⑦。

南部の山麓一帯には阪畑、白鬚神社、四十八鉢、音羽、拝戸、東山の各古墳群が形成される^⑧。音羽古墳群については石穴支群の7基が昭和57年から翌年にかけて発掘調査された。いずれも全長7～10m程の横穴式石室を内部主体とし、6世紀後半に築造が開始されることが判明した。第10号墳奥壁からは棺台と推定される最大幅1.55mの大石が据えられた状態で検出され、第14号墳からは銀象嵌の施された大刀の鐔が検出された^⑨。

奈良時代になると、鴨遺跡南方の永田遺跡に集落が営まれ、続く平安時代前期には鴨遺跡に地方官衙と推定される掘立柱建物が建てられる^⑩。

3. 調査の結果

古墳は主軸を東西にとる帆立貝式前方後円墳である。後円部東側が幅約12mに渡り崩れてはいませんが、全体としては比較的良く原状を留めている。

墳丘は北側部分に二段築成が認められる。基底線は後円部では-4.4m、前方部では-3.8mのコンターラインがまわっている。後円部のテラス部分では-3.0mから-1.8mにかけて認められ前方部平坦面へと続いている。後円部第二段は-1.8mより-0.2mまで急傾をなして墳頂へと至っている。後円部南側でも-1.0m付近まで急傾をなすが、それ以下は墳丘基底線まで緩やかな傾斜が続きテラス部分と墳丘第一段が明瞭ではない。恐らく平野部から望まれる墳丘北側のみを二段築成とし、視覚的

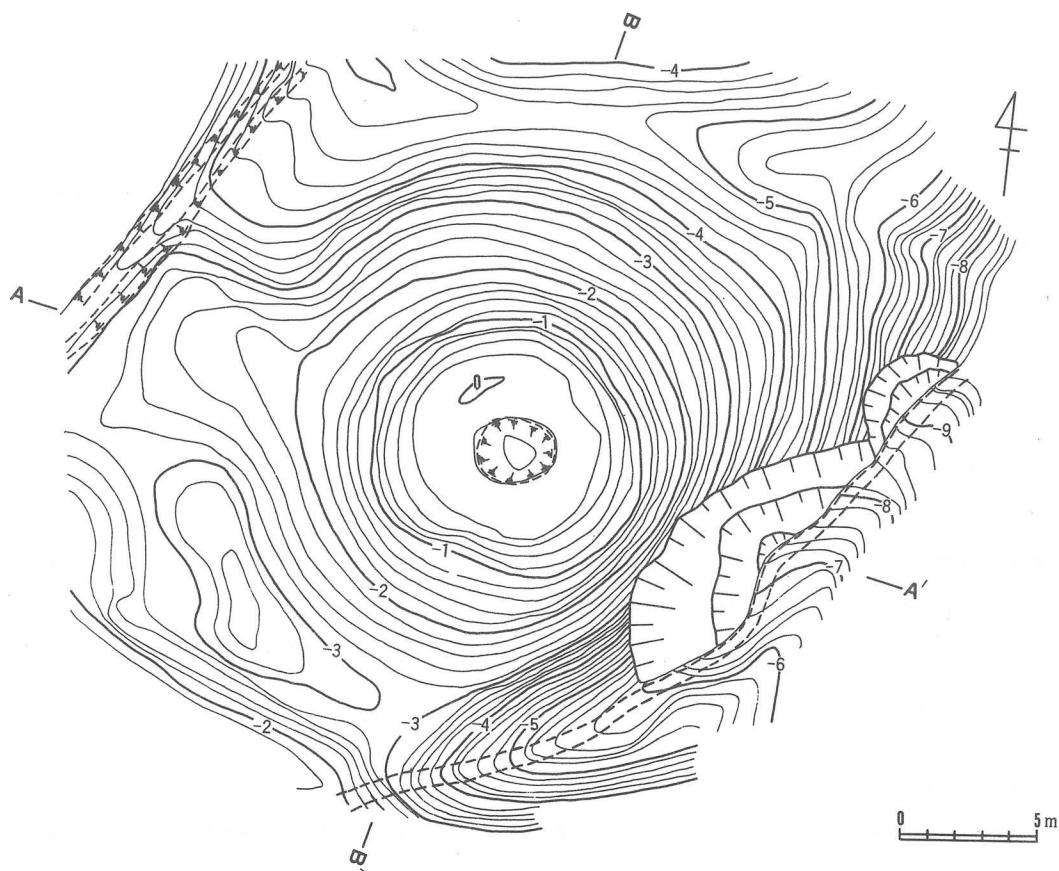


第3図 造り出し部より見た後円部

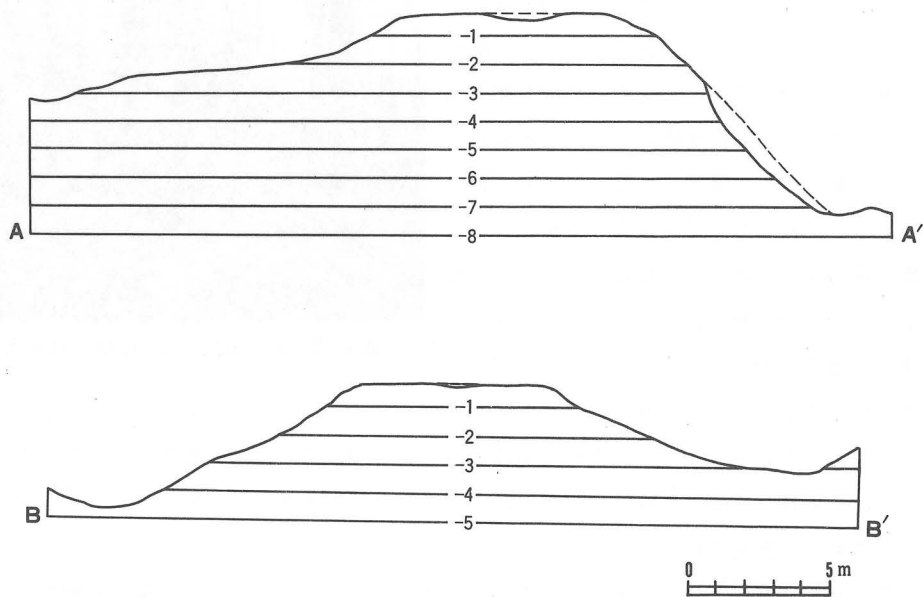
に古墳の規模をより大きく見せるという意図が込められていたものと考えられる。

前方部では-2.2mのラインが北東へ舌状に流れているが、これは後円部第二段の裾部が崩れた為であり、前方部平坦面の外縁は-2.4mのラインとなり後円部第二段の裾-1.8mまで平坦面を形成していたものと推定される。

前方部基底線が北側では-3.8mであることは先述した。前方部正面に北東から南西へと登る里道が続いており、この部分の基底線を想定するのは少し困難であるが、およそ-4.2mと考えて大



第4图 第3支群第10号墳



第5图 墳丘断面图

過ないものと思われる。

以上のように考えると、基底部からの高さは北側では後円部、前方部とも第一段が約1.4m、後円部第二段が約4m、南側では段築がなされておらず後円部は約2.6m、前方部は約0.6mとなる。

平面規模については全長約25m、後円部直径が遺存状態の良い南北で約20m、前方部幅約8mを測る。

墳頂部は直径約7mを測るが、ほぼ中心に直径3m程の凹みが見られる。恐らく盗掘坑であろう。埋葬主体は墳頂の規模から考えると竪穴式石室よりも木棺直葬、或いは粘土槨を想定する方が妥当であろう。

前方部南裾付近と後円部北側斜面において拳大程の石が数個散見される。本来の位置ではなく転落したものと思われるが、外部施設として葺石の存在が予想される。なお埴輪は見あたらなかった。

本墳のすぐ北側には、横穴式石室を前方部と後円部にそれぞれ内包する全長約19mの前方後円墳（第8号墳）が存在するが、本墳との境付近に幅約3m、深さ0.2m程の溝が見られる。この溝は深さを増しながら東方へと続き両古墳を区画するものと考えられる。しかし、この溝が本墳築造の際に掘られたものなのか、それとも第8号墳が近接して築かれた際に新たに設けられたものなのか、いずれであるかは現状調査の段階では判定が困難である。

4. まとめ

現状実測調査の結果、第3支群第10号墳は外部施設として葺石の存在が推定される二段築成の帆立貝式前方後円墳であり、築造時期が5世紀代に遡ると考えられることが明らかになった。従来、高島町では中期に遡る古墳は知られていなかったのであるが、本墳が6世紀後半から築造され始める群集墳に取り囲まれるように存在していることから、本墳の被葬者である在地有力首長と群集墳を築いた集団との間には何らかの血縁的関係を有していたものと考えられる。

ここで、5世紀代における当地方の古墳築造状況について少し述べてみたい。

高島郡内において5世紀代から築造される古墳として新旭町の熊野本古墳群⁽¹²⁾、下平古墳群⁽¹³⁾、安曇川町の王塚・田中古墳群⁽¹⁴⁾が挙げられる。熊野本古墳群は前方後方墳1基、方墳7基、円墳28基から、下平古墳群は方墳1基、円墳5基から、そして王塚・田中古墳群は現在宮内庁陵墓参考地である帆立貝式前方後円墳1基⁽¹⁵⁾と円墳1基、方墳43基から構成されている。各古墳群とも中期の段階において古墳が群集する傾向にある。これら古墳群は高島平野を開発、統合した在地の三大有力集団の抬頭を示すものであろうが、気になるのは主墳と目される古墳の墳形がいずれも前方後円墳ではなく前方後方墳、帆立貝式前方後円墳、方墳といった点である。周辺において前方後円墳が築かれているのは、4世紀末から5世紀初めと推定されている西浅井町の丸山古墳群第1号墳⁽¹⁶⁾のみである。早くから大和朝廷との関係を有したものと考えられる。

丸山古墳群のように早い時期に前方後円墳を築造し得る勢力を持つ在地首長が存在するにもかかわらず、5世紀代の在地首長は前方後円墳以外の墳形を採用している。この時期に在地首長の勢力が著しく弱体化したとも考えられるが、先述した王塚古墳は帆立貝式の墳形でありながら埴

輪・葺石を有する二段築成の直径約58mという規模を誇り、継体天皇の父彦主人王の墓と目されていることからすれば、この時期の首長達が前方後円墳を築き得る程の勢力を有していなかったとは一概には考えられない。このような動向に対して、5世紀代には河内王朝の規制力が強化された為に在地首長達が前方後円墳を築造できなくなったという政治的な理由を考える見解^⑬がある。

高島町内において、5世紀代に唯一古墳を築造することの可能であった在地首長がその墳形を帆立貝式前方後円墳とし、前方後円墳を採用していないのは先にみた古墳群と同様である。しかし、首長墳のみが築かれ首長に続く有力者の古墳が築造されていない点が他地域と異なっている。

今回の帆立貝式前方後円墳の実測調査を通じて気づかれる点を述べてきたが、5世紀代における当地方の首長達の動向を解明する為には、他地域との比較や大和朝廷との関係などを含めてより広い視野からの検討が必要であろう。

(文責 渡部俊哉)

<註>

- ① 「拜戸古墳群」(『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』滋賀県教育委員会 昭和43年)
- ② 『増補 高島郡誌』(高島郡教育会 昭和47年)
- ③ 『鴨遺跡』(高島町教育委員会 滋賀県教育委員会 財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和55年)
- ④ 『近江国高島郡水尾村の古墳』(京都帝国大学文学部考古学研究報告第八冊 大正12年)
- ⑤ 『高島町史』(高島町役場 昭和58年)
- ⑥ 関西学院大学考古学研究会 「高島郡高島町鴨稻荷山古墳現状実測調査報告」(『滋賀文化財だより』第22号 財団法人滋賀県文化財保護協会 昭和54年)
- ⑦ 『鴨稻荷山古墳周遡確認調査』(高島町教育委員会 昭和56年)
- ⑧ ⑤に同じ
- ⑨ 『音羽古墳群Ⅰ ～石穴支群調査概要報告～』(高島町教育委員会 昭和59年)
- ⑩ 高島町教育委員会の白井忠雄氏の御教示による。
- ⑪ ③に同じ
- ⑫ 『高島郡新旭町熊野本 熊野本遺跡分布調査報告書』(滋賀県教育委員会 昭和44年)
- ⑬ ⑤に同じ
- ⑭ 「王塚・田中古墳群」(『国道161号線・高島バイパス遺跡分布調査概要報告書』 滋賀県教育委員会 昭和46年)
- ⑮ もとは円墳であったが後世に前方部が付設された、とする説もある。
- ⑯ 「丸山古墳群」(『国鉄湖西線関係遺跡分布調査報告書』 滋賀県教育委員会 昭和43年)
- ⑰ 小野山節 「五世紀における古墳の規制」(『考古学研究』第16巻第3号 昭和45年)